

日本大学・医学部

試験日 2023年2月1日 時間60分 数学Ⅰ|数学Ⅱ|数学Ⅲ|数学A|数学B(数列, ベクトル)

- 1** (1) $U = \{x \mid 1 \leq x \leq 9, x \text{ は整数}\}$ を全体集合とする. U の部分集合 A, B について,
 $\overline{A \cap B} = \{1, 4, 7, 9\}$, $\overline{A \cup B} = \{5, 8\}$ であるとき, B の要素のうち最大の数は $\boxed{1}$ である.
- (2) 方程式 $x^2 - |x| - 6 = 0$ の解は $x = \boxed{2} \boxed{3}, \boxed{4}$ である.
- (3) 方程式 $2x + 11y = 5$ を満たす整数 x, y のうち, $100 < x + y < 500$ を満たす組は $\boxed{5} \boxed{6}$ 組ある.
- (4) 点 $(3, 1)$ を通り, 円 $x^2 + y^2 = 5$ に接する直線のうち, 傾きが正であるものの方程式は $y = \boxed{7}x - \boxed{8}$ である.
- (5) $2^x = 4^y = 5^z = 10$ のとき, $\frac{1}{x} - \frac{1}{y} - \frac{1}{z} = \boxed{9} \boxed{10}$ である.
- 2** 複素数 z は $z + \bar{z} = -4$, $|z + 6| = 2\sqrt{7}$ を満たすとする. ただし, \bar{z} は z の共役な複素数である.
- (1) i を虚数単位とする. $z = \boxed{11} \boxed{12} \pm \boxed{13} \sqrt{\boxed{14}} i$ である.
- (2) z^n が実数になるような最小の自然数 n の値は $\boxed{15}$ であり, そのときの z^n の値は $\boxed{16} \boxed{17}$ である.
- 3** 2つの箱 A, B があり, A には赤球 3 個, 白球 5 個, B には赤球 4 個, 白球 5 個が入っている. まず, A または B の箱を選び, 選んだ箱から球を 2 個取り出す. ただし, A, B の箱を選ぶ事象は同様に確からしいとし, また, 1 個の球を取り出す事象はどれも同様に確からしいとする.
- (1) 取り出された球が 2 個とも赤球である確率は $\frac{\boxed{18} \boxed{19}}{\boxed{20} \boxed{21} \boxed{22}}$ である.
- (2) 取り出された球が 2 個とも赤球であるとき, それらが A の箱から取り出された球である条件付き確率は, $\frac{\boxed{23}}{\boxed{24} \boxed{25}}$ である.
- 4** 平行六面体 OABC - DEFG において, 辺 OC の中点を H, 辺 DG を 3 : 1 に内分する点を I, 辺 EF と平面 AHI の交点を J, 対角線 OF と平面 ADH および AHI の交点をそれぞれ P, Q とする.
- (1) $\frac{OP}{OF} = \frac{\boxed{26}}{\boxed{27}}$ である.
- (2) $\triangle AEJ$ および平行四辺形 ABFE の面積をそれぞれ S_1, S_2 とすると, $\frac{S_1}{S_2} = \frac{\boxed{28}}{\boxed{29}}$ である.
- (3) OP : PQ : QF を最も簡単な整数比で表すと, $\boxed{30} : \boxed{31} : \boxed{32} \boxed{33}$ である.
- 5** n を自然数とする. $a_n = \tan^n \frac{\theta}{2}$ ($-\pi < \theta < \pi$) で定められる数列 $\{a_n\}$ を考える.
- (1) $\theta = -\frac{\pi}{12}$ のとき, $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \boxed{34}$ である.
- (2) $\theta = \frac{\pi}{35}$ のとき, $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n$ は収束するが, $\sum_{n=1}^{\infty} a_n$ は収束しない. このとき, $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \boxed{36}$ である.
- (3) $\theta = \frac{\pi}{3}$ のとき, $\sum_{n=1}^{\infty} a_n = \frac{\sqrt{\boxed{37}} + \boxed{38}}{\boxed{39}}$ であり, $\theta = \frac{\pi}{6}$ のとき, $\sum_{n=1}^{\infty} a_n = \frac{\sqrt{\boxed{40}} - \boxed{41}}{\boxed{42}}$ である.
- 6** $f(x) = \int_0^x t(t-1)(t-x) dt$ とする.
- (1) $f(x)$ の最大値は $\frac{\boxed{43}}{\boxed{44} \boxed{45}}$ であり, $f(x)$ の第 2 次導関数 $f''(x)$ の最大値は $\frac{\boxed{46}}{\boxed{47}}$ である.
- (2) 曲線 $y = f(x)$ と x 軸とで囲まれた部分を D とすると, D の面積は $\frac{\boxed{48}}{\boxed{49} \boxed{50}}$ であり, D を x 軸のまわ

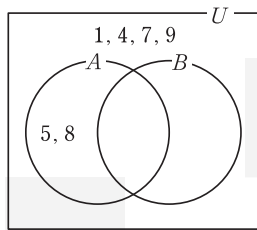
2 日本大学・医学部

りに1回転させてできる立体の体積は $\frac{51}{52 \cdot 53 \cdot 54} \pi$ である.

1 (1) **数学I** 【集合の雑題】 **基本**

▶解答 $U = \{1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9\}$
 のうちの

$\{5, 8\} = \overline{A \cup B} = A \cap \overline{B}$
 は \subset にあり, $\{1, 4, 7, 9\} = \overline{A \cap B}$ は \supset にある. 残りの2, 3, 6は B にある. B の要素のうち最大の数は6



(2) **数学I** 【2次方程式】 **基本**

▶解答 $x^2 - |x| - 6 = 0$ ①

$x^2 = |x|^2$ であるから, ①は

$$|x|^2 - |x| - 6 = 0$$

$$(|x| - 3)(|x| + 2) = 0$$

となる. $|x| \geq 0$ より

$$|x| = 3 \quad \therefore x = \pm 3$$

▶別解 $x \geq 0$ のとき, ①は

$$x^2 - x - 6 = 0$$

$$(x - 3)(x + 2) = 0$$

となるから, $x \geq 0$ より $x = 3$

$x \leq 0$ のとき, ①は

$$x^2 - (-x) - 6 = 0$$

$$(x + 3)(x - 2) = 0$$

となるから, $x \leq 0$ より $x = -3$

したがって, $x = -3, 3$

(3) **数学A** 【不定方程式】 **標準**

▶解答 $x = \frac{5 - 11y}{2} = 2 - 5y - \frac{y - 1}{2}$

が整数であるから $\frac{y - 1}{2} = k$ とおける. k は整数である. $y = 2k + 1$ であるから

$$x = 2 - 5(2k + 1) - k = -11k - 3$$

$100 < x + y < 500$ に代入し

$$100 < -9k - 2 < 500$$

$$-502 < 9k < -102$$

$$-\frac{502}{9} < k < -\frac{34}{3}$$

$$-55 \dots < k < -11 \dots$$

$$-55 \leq k \leq -12$$

k は $-12 + 55 + 1 = 44$ 個ある. (x, y) は 44 個ある.

▶別解 $2x + 11y = 5$ ①

$$2 \cdot 8 + 11 \cdot (-1) = 5 \dots\dots\dots ②$$

① - ② より

$$2(x - 8) + 11(y + 1) = 0$$

2と11は互いに素であるから, k を整数として

$$x - 8 = 11k$$

とおけて, このとき $y = -2k - 1$ となる. 以下省略.

(4) **数学II** 【円と直線】 **標準**

▶解答 直線 $x = 3$ は円 $x^2 + y^2 = 5$ の接線ではないから, 求める接線の方程式は傾きを $m (> 0)$ として $y = m(x - 3) + 1$ と表せる.

これが円に接するのは, 円の中心 $(0, 0)$ と直線の距離が, 円の半径 $\sqrt{5}$ と等しくなるときであるから

$$\frac{|m \cdot 0 - 0 - 3m + 1|}{\sqrt{m^2 + (-1)^2}} = \sqrt{5}$$

$$|-3m + 1| = \sqrt{5(m^2 + 1)}$$

$$(-3m + 1)^2 = 5(m^2 + 1)$$

$$4m^2 - 6m - 4 = 0$$

$$(2m + 1)(m - 2) = 0$$

$m > 0$ より $m = 2$ となり, 求める接線の方程式は

$$y = 2(x - 3) + 1$$

$$y = 2x - 5$$

(5) **数学II** 【対数の計算】 **基本**

▶解答 $2^x = 10, 4^y = 10, 5^z = 10$ より

$$2 = 10^{\frac{1}{x}}, 4 = 10^{\frac{1}{y}}, 5 = 10^{\frac{1}{z}}$$

$$\frac{2}{4 \cdot 5} = 10^{\frac{1}{x} - \frac{1}{y} - \frac{1}{z}}$$

$$10^{-1} = 10^{\frac{1}{x} - \frac{1}{y} - \frac{1}{z}}$$

$$\frac{1}{x} - \frac{1}{y} - \frac{1}{z} = -1$$

2 **数学III** 【ド・モアブルの定理】 **標準**

▶解答 $z = x + yi$ (x, y は実数) とおく.

(1) $z + \bar{z} = -4, |z + 6| = 2\sqrt{7}$ より $2x = -4$ で,

$$(x + 6)^2 + y^2 = 28$$

$x = -2, y^2 = 12$ となり $y = \pm 2\sqrt{3}$.

$z = -2 \pm 2\sqrt{3}i$

(2) $z = 4\left(-\frac{1}{2} \pm \frac{\sqrt{3}}{2}i\right)$

$\theta = \pm \frac{2\pi}{3}$ として $z = 4(\cos\theta + i\sin\theta)$

ド・モアブルの定理より

$z^n = 4^n(\cos n\theta + i\sin n\theta)$

となる. これが実数になる n は $n\theta = \pm \frac{2n\pi}{3}$ が π の整数倍になるもので, 最小の n は **3** である. このとき

$z^3 = 4^3(\cos 2\pi) = 64$

3 **数学A** 【条件付き確率】 **基本**

▶解答◀ (1) Aの箱を選んで赤球を2個取り出すという事象を A とする.

$P(A) = \frac{1}{2} \cdot \frac{{}_3C_2}{{}_8C_2} = \frac{1}{2} \cdot \frac{3 \cdot 2}{8 \cdot 7} = \frac{3}{56}$

また, Bの箱を選んで赤球を2個取り出す確率は

$\frac{1}{2} \cdot \frac{{}_4C_2}{{}_9C_2} = \frac{1}{2} \cdot \frac{4 \cdot 3}{9 \cdot 8} = \frac{1}{12}$

である. 赤球を2個取り出す事象を R とする.

$P(R) = \frac{3}{56} + \frac{1}{12} = \frac{3 \cdot 3 + 14}{168} = \frac{23}{168}$

(2) 求める条件付き確率は

$P_R(A) = \frac{P(A)}{P(R)} = \frac{\frac{3}{56}}{\frac{23}{168}} = \frac{9}{23}$

4 **数学B** 【ベクトルと図形(空間)] **標準**

▶解答◀ (1) PはOF上にあるから,

$\vec{OP} = s\vec{OF} = s\vec{OA} + s\vec{OC} + s\vec{OD}$ ①

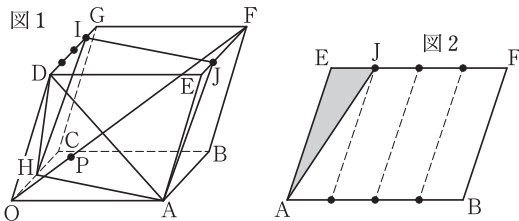
と表せる. Hは辺OCの中点であるから $\vec{OC} = 2\vec{OH}$ である.

$\vec{OP} = s\vec{OA} + 2s\vec{OH} + s\vec{OD}$

であり, さらにPが平面ADH上にあるから

$s + 2s + s = 1 \quad \therefore s = \frac{1}{4}$

である. したがって, $\frac{OP}{OF} = s = \frac{1}{4}$



(2) $\vec{OI} = \frac{1}{4}\vec{OD} + \frac{3}{4}\vec{OG}$

$= \frac{1}{4}\vec{OD} + \frac{3}{4}(\vec{OC} + \vec{OD}) = \frac{3}{4}\vec{OC} + \vec{OD}$

Jは平面AHI上にあるから $\vec{OJ} = x\vec{OA} + y\vec{OH} + z\vec{OI}$,

$x + y + z = 1$ とおけて

$\vec{OJ} = x\vec{OA} + \frac{y}{2}\vec{OC} + z\left(\frac{3}{4}\vec{OC} + \vec{OD}\right)$

$= x\vec{OA} + \left(\frac{y}{2} + \frac{3}{4}z\right)\vec{OC} + z\vec{OD}$ ②

また, JはEF上にあるから

$\vec{OJ} = (1-w)\vec{OE} + w\vec{OF}$

$= (1-w)(\vec{OA} + \vec{OD}) + w(\vec{OA} + \vec{OC} + \vec{OD})$

$= \vec{OA} + w\vec{OC} + \vec{OD}$ ③

とおける. ②, ③の係数を比べ

$x = 1, \frac{y}{2} + \frac{3}{4}z = w, z = 1$

$x + y + z = 1$ もあわせて $y = -1$

$w = -\frac{1}{2} + \frac{3}{4} = \frac{1}{4}$

EJ : JF = $w : (1-w) = 1 : 3$

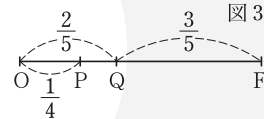
図2を見よ. $\frac{S_1}{S_2} = \frac{1}{8}$ である.

(3) \vec{OQ} も①, ②の形に表され

$x = s, \frac{y}{2} + \frac{3}{4}z = s, z = s$

よって $y = \frac{1}{2}s$ で, $x + y + z = 1$ に代入すると $\frac{5}{2}s = 1$

$s = \frac{2}{5}$ で $\vec{OQ} = \frac{2}{5}\vec{OF}$



$OP : PQ : QF = \frac{1}{4} : \left(\frac{2}{5} - \frac{1}{4}\right) : \frac{3}{5} = 5 : 3 : 12$

5 **数学III** 【無限等比級数】 **標準**

▶解答◀ (1) $r = \tan \frac{\theta}{2}$ とおく.

$\theta = -\frac{\pi}{12}$ のとき $-\frac{\pi}{4} < \frac{\theta}{2} = -\frac{\pi}{24} < \frac{\pi}{4}$ であるから $|r| < 1, a_n = r^n$ であり, $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 0$

(2) $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n$ が収束する条件は $-1 < r \leq 1$ である.

$-1 < r < 1$ のときは $\sum_{n=1}^{\infty} a_n$ は収束する.

$r = 1$ のときは $a_n = 1$ であるから $\sum_{n=1}^{\infty} a_n$ は収束しない.

よって, 本問では $r = 1$ であり, $\tan \frac{\theta}{2} = 1$ で $\frac{\theta}{2} = \frac{\pi}{4}$ ゆえに $\theta = \frac{\pi}{2}$ であり, $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 1$

(3) $-1 < r < 1$ のとき $\sum_{n=1}^{\infty} a_n = r \cdot \frac{1}{1-r} = L$

とおく.

$\theta = \frac{\pi}{3}$ のとき $r = \tan \frac{\pi}{6} = \frac{1}{\sqrt{3}}$

$L = \frac{1}{\sqrt{3}} \cdot \frac{1}{1 - \frac{1}{\sqrt{3}}} = \frac{1}{\sqrt{3} - 1} = \frac{\sqrt{3} + 1}{2}$

4 日本大学・医学部

$\theta = \frac{\pi}{6}$ のとき

$$\begin{aligned} r &= \tan \frac{\pi}{12} = \tan \left(\frac{\pi}{3} - \frac{\pi}{4} \right) \\ &= \frac{\tan \frac{\pi}{3} - \tan \frac{\pi}{4}}{1 + \tan \frac{\pi}{3} \tan \frac{\pi}{4}} = \frac{\sqrt{3} - 1}{1 + \sqrt{3}} \\ L &= \frac{\sqrt{3} - 1}{\sqrt{3} + 1} \cdot \frac{1}{1 - \frac{\sqrt{3} - 1}{\sqrt{3} + 1}} \\ &= \frac{\sqrt{3} - 1}{\sqrt{3} + 1 - \sqrt{3} + 1} = \frac{\sqrt{3} - 1}{2} \end{aligned}$$

6 **数学Ⅲ**【体積】 **標準**

▶解答◀ (1)

$$\begin{aligned} f(x) &= \int_0^x t(t-1)(t-x) dt \\ &= \int_0^x \{t^2(t-1) - t(t-1)x\} dt \\ &= \int_0^x t^2(t-1) dt - x \int_0^x t(t-1) dt \end{aligned}$$

であるから

$$\begin{aligned} f'(x) &= x^2(x-1) \\ &\quad - \left\{ 1 \cdot \int_0^x t(t-1) dt + x \cdot x(x-1) \right\} \\ &= - \int_0^x t(t-1) dt \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} f''(x) &= -x(x-1) = -x^2 + x \\ &= -\left(x - \frac{1}{2}\right)^2 + \frac{1}{4} \end{aligned}$$

である。よって、 $f''(x)$ の最大値は

$$f''\left(\frac{1}{2}\right) = \frac{1}{4}$$

である。また

$$\begin{aligned} f'(x) &= - \int_0^x t(t-1) dt = - \int_0^x (t^2 - t) dt \\ &= - \left[\frac{1}{3}t^3 - \frac{1}{2}t^2 \right]_0^x = -\frac{1}{3}x^3 + \frac{1}{2}x^2 \\ &= -\frac{1}{6}x^2(2x-3) \end{aligned}$$

であるから、 $f(x)$ の増減表は次のようになる。

x	...	0	...	$\frac{3}{2}$...
$f'(x)$	+	0	+	0	-
$f(x)$	↗		↗		↘

ここで、 $f'(x) = -\frac{1}{3}x^3 + \frac{1}{2}x^2$ より

$$f(x) = -\frac{1}{12}x^4 + \frac{1}{6}x^3 + C \quad (C \text{ は積分定数})$$

であり、 $f(0) = 0$ より $C = 0$ であるから

$$f(x) = -\frac{1}{12}x^4 + \frac{1}{6}x^3$$

となる。したがって、 $f(x)$ の最大値は

$$\begin{aligned} f\left(\frac{3}{2}\right) &= -\frac{3^4}{2^6 \cdot 3} + \frac{3^3}{2^4 \cdot 3} = \frac{-3^3 + 2^2 \cdot 3^2}{2^6} \\ &= \frac{-27 + 36}{64} = \frac{9}{64} \end{aligned}$$

(2) $f(x) = -\frac{1}{12}x^4 + \frac{1}{6}x^3 = -\frac{1}{12}x^3(x-2)$ より、 D は図の網目部分である。



よって、 D の面積を S とおくと

$$\begin{aligned} S &= \int_0^2 f(x) dx = \int_0^2 \left(-\frac{1}{12}x^4 + \frac{1}{6}x^3\right) dx \\ &= \left[-\frac{1}{60}x^5 + \frac{1}{24}x^4\right]_0^2 = -\frac{8}{15} + \frac{2}{3} = \frac{2}{15} \end{aligned}$$

また、 D を x 軸のまわりに 1 回転させてできる立体の体積を V とおくと

$$\begin{aligned} V &= \int_0^2 \pi \{f(x)\}^2 dx = \frac{\pi}{144} \int_0^2 x^6(x-2)^2 dx \\ &= \frac{\pi}{144} \int_0^2 (x^8 - 4x^7 + 4x^6) dx \\ &= \frac{\pi}{144} \left[\frac{1}{9}x^9 - \frac{1}{2}x^8 + \frac{4}{7}x^7 \right]_0^2 \\ &= \frac{\pi}{144} \cdot 2^7 \left(\frac{4}{9} - 1 + \frac{4}{7} \right) \\ &= \frac{8}{9}\pi \cdot \frac{28 - 63 + 36}{63} = \frac{8}{567}\pi \end{aligned}$$

◆別解◆ $f(x)$ を直接計算すると次のようになる。

$$\begin{aligned} f(x) &= \int_0^x t(t-1)(t-x) dt \\ &= \int_0^x \{t^3 - (x+1)t^2 + xt\} dt \\ &= \left[\frac{1}{4}t^4 - \frac{x+1}{3}t^3 + \frac{x}{2}t^2 \right]_0^x \\ &= \frac{1}{4}x^4 - \frac{1}{3}(x^4 + x^3) + \frac{1}{2}x^3 = -\frac{1}{12}x^4 + \frac{1}{6}x^3 \end{aligned}$$

◆要の分析◆ 前年度と同様の構成である。標準的な問題であるが、時間に対して量が多い、速く、正確な計算力が要求されている。また、無限等比級数が前年度に続いて大問で出題された。

(SM, 渡邊, 都賀, 坂本賀, 前田拓, 安田亨)